

8月1日 年間第18主日

コヘ 1:2, 2:21～23 コロ 3:1～11 ルカ 12:13～21

1. ルカ

v.20 「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか。」

この引用句は、今朝の朗読に配分されているコヘレトの言葉と共に、人生のむなしさを見事に表現しているように見えます。しかし、もし私たちがこの引用句を福音書の前後関係から切り離さずに、これを使徒たちの宣教の一部として解釈すると、死および終末の裁きの問題への解決としてキリストから教会に与えられた、喜びに満ちた復活の希望の福音が聞こえて来ます。イエス・キリストは死に勝利して復活し、私たち信じる者を罪と死の束縛から解放してくださいました。この福音に固く立つことへの招きが、すべてのキリスト者への今朝のメッセージです。

2.

日本のカトリック教会が現在使用している“葬儀の儀式書”は、典礼憲章の方針に従った改訂されたローマ儀式書に基づいて作られました。その第一の特徴は、“キリスト信者の死の過越の性格をより明らかに表現する”ことであると、序文の中で述べられています。現代の教会が、使徒たちから伝えられた初代教会の信仰と教えの貴重な遺産を、このように明瞭な形で儀式書に表現するに至ったことを、私たちは主に感謝しましょう。この儀式書の緒言の中から、その最初の部分を以下に引用します。

「教会は葬儀において、何よりも復活信仰を表明し、…… 神の偉大なわざを記念し、感謝をささげる。それは、死んで復活されたキリストに洗礼によって結ばれた信者が、キリストと共に死を通して生命に移るよう、すなわち故人が清められて、聖なる選ばれた者と共に受け入れられ、キリストの再臨と使者の復活を待ち望むよう祈るためである。…… こうして、互いにキリストの体の部分として交わっている者は救いの業に与り、遺族、参列者は希望と慰めを受ける。…… 教会の葬儀は、…… 洗礼によってキリストの死に結ばれた者が、その復活にも結ばれることが出来るという復活への信仰を新たにし、宣言する場でもある。」

使徒たちは、死者たちは“眠りについた”と言いました。決して“昇天した”とか“天に召された”などという作り話を語りはしませんでした。なぜなら彼らは私たちと共に、“神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちも”終末の日に復活させてくださると、信じていたからです(1テサ 4:14)。

西欧世界をよびその影響下にある我が国の通俗的な宗教心にとって、これまでギリシア的な靈魂不滅の思想がキリスト教本来の信仰だという考えが、広く行き渡っていました。しかし使徒たちが伝えたことは、明らかにそれとは違っていました。今や私たちは、“死者の復活の希望”こそが使徒たちの宣教の中心的な主題であったことを、誠実に認めるようにと呼びかけられているのです。私たちは「神の子とされること、

つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。私たちは、このような希望によって救われているのです。」(ロマ8:23-24)

3. コロ

vv.3-4 「あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」

この目標を目指して生きる生活を、聖書は“神の前に豊かになる”“富を天に積む”などと表現しています。しかしそれは、地上の生活を無意味なものと考えて逃避することではありませんでした。各自はそれぞれ神からの賜物を授かっており、その恵みの良い管理者として賜物を生かして互いに仕えることを使徒たちは教えました。私たちが日常の生活と仕事の中で、この復活の希望に固く立って歩み、この希望について「いつでも弁明できるように備えている」(1ペト3:15)ことを初代教会は教えたのでした。

この信仰、この希望を、21世紀の教会は再び自らに取り戻さなければなりません。なぜなら今日の世界の急速なキリスト教離れは、すでに久しく教会が“復活の希望の福音”を語ることをやめ、自らもこれを見失って来た結果だからです。教会は“塩気を失った塩”になってしまったのです。

しかし、神のことばは生きて語り続けています。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マコ1:15) ハレルヤ、アーメン。

8月8日 年間第19主日

知 18:6～9 ヘブ 11:1-2,8-19 ルカ 12:32～48

1. ヘブ

vv.1-2 「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。昔の人たちは、この信仰の故に神に認められました。」

キリスト教の信仰は、使徒たちから伝えられたものです。そして初代教会はこれを旧約のイスラエルから受け継ぎました。すなわち神のイスラエルへの約束(望んでいる事柄)を確信し、その将来における実現(見えない事実)を待望する信仰によって、教会は2千年の歴史を歩んで来たのでした。現代の私たちの教会も、この神の遠大な救済史の中であって、終わりの日の主の再臨を待ち望んでいます。なぜなら福音とはこの日の希望を語り伝えるものだからです。「主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。」(1コリ4:14)

この希望は死者の中からの復活と固く結びついています。キリスト教は旅人の宗教だと言われるのは、地上に最終的な希望を置かないで、来るべき天の都を待望しているからであって、新しいイスラエルである教会(ガラ6:16)は、この希望を旧約のイスラエルから受け継ぎました。なぜならイスラエルの神ヤーウェこそは、私たちの主イエス・キリストの父なる神だからです。ですからキリスト教の希望は、旧約の父祖たちの希望と同じものです。

v.13 「この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでした。はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。」

2. ルカ

その日に再臨の主をお迎えする民として、教会は目を覚ましていることを主から求められています。各自はその能力に応じて、主体的な信仰を要求されていることを自覚しなければなりません。それは聖職者や修道者たちだけの世界に閉じこめられている事柄ではなくて、信徒一人一人に直接関わる問題であることを、このテキストは語っています。

現代の日本の教会は、司祭の老齢化による聖職者不足に直面しています。否定することの出来ないこの事実の前で、もし自覚ある信徒の中から、「キリストの体の建設に関しては、すべての信者に共通の尊厳と働きの真実の平等性がある」という教会憲章32の言葉に目覚める者が起こされるなら、それは願わしいことです。

教会が主の再臨を待っている群であることを自覚し、信徒一人一人が目覚ましているようにと、彼らのために奉仕する賜物を与えられた人は幸いです。ペトロは尋ねました。「主よ、この譬えは私たち(使徒

たち)のために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか。」 賜物は聖職者、信徒の区別なく、主の御心に適う人に与えられます。そしてそれは「布に包んでしまっておく」(ルカ 19:20) べきものではありません。「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、さらに多く要求される」(v.48) のです。

3. 知

「あの夜のこと」(v.6) とは、出 12 に物語られているイスラエルのエジプト脱出の夜の出来事のことです。それはイスラエルの聖なる伝承の中であって、彼らが神の民となった起源の物語りでありました。すでに事件から 1200 年を経た頃の知恵の書は、当時のイスラエルがなお神の救済史の中を歩んでいることを思っ
て、昔日を回顧して語ったのでした。「神に従う人々の救いと、敵どもの滅びを、あなたの民は待っていた。…… そのとき彼らは先祖たちの賛歌を歌っていた。」(w.7,9)

このようなイスラエルの伝承は、旧約聖書によってその民に受け継がれて来ていました。初代教会はこれに新約聖書を加えて、キリスト教の正典としたのです。新約聖書と並んで聖伝も、使徒たちが伝えたことの遺産として、カトリック教会は今日に至るまで大切にしています。

ですから、「聖伝と聖書とは、教会に託された神のことばの“一つの聖なる委託物”を形造っている」(神の啓示に関する教義憲章 10) と述べられている通り、聖職者や修道者はもちろんのこと、信徒一人一人も自ら真剣に学ぶことが大切です。聖伝を学ぶには“ミサ典礼書の総則”や各種の儀式書が有益であり、聖書を学ぶには先ず根気よく通読を繰り返すことが何よりもいちばんです。

救済史の完成である神の国を待ち望んでいる教会は、イエス・キリストについての宣教を聞くことによって、秘められた計画(ロマ 16:25)を知ることが出来るのであり、信仰による従順に生きることになるのですから。
ハレルヤ、アーメン。

8月15日 聖母の被昇天

黙 11:19～12:10 | コリ 15:20～27a ルカ 1:39～56

1. コリ

使徒たちが伝え、教会がそれを受け入れて今日に至るまで信じて来た福音は、死に勝利して復活された救い主イエス・キリストの福音です。

vv.20-22 「しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。」

この福音は教会にとって最も大切なものであって、どんなに世の中が変わっても“ほかの福音” “もう一つ別の福音” に乗り換えるなどということは決してあり得ません。それは教会の命であって、この福音から離れてはイエス・キリストの救いは存在しないからです。

神はこの御子イエス・キリストを、おとめマリアの胎を通してこの世に送って下さいました。“現在は復活して天におられる主” をかつて産んだ母は、ガリラヤのナザレ出身の一人の女でありました。この祝福された女の記憶は、福音書を通して伝えられています。

2. ルカ

ここで主の母マリアは、聖書における神の救済史の証人として、ヨハネの母エリサベトと共に描かれています。マリアの産む子はイスラエルの救い主、神の子であって、イザ 9:5-6 の預言を実現する方として天使によって説明され(ルカ 1:31-33)、マリアはイスラエルの父祖アブラハムのように信仰によってこれを受け入れます。エリサベトの胎内の子ヨハネはマリアの挨拶を聞いて喜び、その母も預言者の霊に満たされて主の母マリアに祝福の挨拶を返して言います。「主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」(v.45)

有名なマリアの賛歌は、全体としてサム上 2:1-10 の“ハンナの祈り” に倣って、旧約聖書における神の大いなる救済の御業の連鎖を歌い、アブラハムに約束されたイスラエルのメシア的希望の実現として、イエスの誕生の出来事を賛美しています(vv.54-55)。

新約聖書が語っているように、初代教会の福音宣教を復活のキリストから委ねられたのは使徒たちでありました。使徒たちの指導の下で多くの奉仕者たちが宣教と教えのために働いていたことが推察されますが、イエスの母マリアについては福音書の記事の中で非常に控えめな女としての記述されている以外には、ほとんど何も伝えられていません。彼女は“神の母” として選ばれて特別に祝福された女なのであり、福音書の中で神の救済史の証人として、他に抜きん出て光り輝いているのです。それが彼女に与えられた神の恵みでありました。

3.

このようにマリアは、教会の福音宣教や教えの前面に立つことはありませんでした。それは使徒およびその後継者たちに委ねられたことであつたからです。しかし彼女は教会の記憶の中で、特別な崇敬をもって愛され、やがてあらゆる危険と必要に際して信者がその保護を祈り求める救援者として、早くから大切にされるようになりました。

すべての人の贖いとして御自身を献げられたのはイエス・キリストだけですから、「神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。」(1テモ 2:5) マリアの役割は、「唯一の仲介者であるキリストの尊厳と効力から何ものをも取り去らず、また何ものをも付加しないという意味に解釈されなければならない」(教会憲章 62) のです。その上でなお、「教会はこのような従属的なマリアの役割をためらわず宣言し、絶えずこれを経験し、なおこの母の保護に支えられて、仲介者・救い主にいっそう親密に一致するよう、これを信者の心に勧める」(同) と、述べられています。

確かにマリア崇敬に関して、これまでカトリック教会の内部でも繰り返し議論され、今日もなお諸説が述べられていることを容認するとしても、現代のキリスト者が教会憲章に耳を傾けることは大切なことです。

「また神学者ならびに神のことばを伝える人々に対しては、神の母の独特の尊厳について考察する際、あらゆる偽りの誇張を避けるとともに、過度の心の狭さを避けるように熱心に勧告する。」(同 67)

マリアは聖書の中で、神の救済史の証人として他に抜きん出て光り輝いているのですから。死者の復活の日には、神の国を受け継ぐすべての人と共にマリアも朽ちない者とされて(1コリ 15:52)、キリストの栄光ある体と同じ形に変えられるでしょう(フィリ 3:21)。 ハレルヤ、アーメン。

8月22日 年間第21主日

イザ 66:18～21 ヘブ 12:5～13 ルカ 13:22～30

1. ルカ

v.24 「狭い戸口から入るように努めなさい。」

イエスはエルサレムに近づき、イスラエルの指導者たちとそこで対決することを思って、話題を弟子たちからもっと広い視野に移されました。マタ7:13-14と並行するこの有名な言葉が、ルカ福音書ではイスラエル人の悔い改めの困難さを指摘するために用いられています。救われるのはイスラエル全体なのか、それとも残りの者(イザ 10:20-23、エシ 23:3-4 参照)だけなのかという設問に対して、イエスはイスラエルへの断罪と異邦人が神の国に集められることを語られた場面で、この言葉を用いられたという構成になっているのです。「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある」(v.30) のだから、と説明さるのです。v.26 はイスラエルの指導者たちの弁明であり、イスラエル人たちは「わたしたちの広場でお教えを受けた」はずでありました。

私たちが知っている現代の教会で、キリストの福音は語られて来たでしょうか。キリストの福音はまず第一に神の国の福音であり、さらに十字架と復活の福音、そして生きている者と死んだ者を裁くために再び来られる終末のキリストの福音であることを、人々は聞かされて来たでしょうか。あたかも聖書が新しい道徳の教科書であって、信仰とはそれらの多くの教えを実行することであるような誤解がキリストの福音を覆い隠しているのではありませんか。使徒たちが伝えた本来の「神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」(使 20:21) が、現代の教会の「わたしたちの広場」では久しく教えられることがありませんでした。

しかし福音書が語っているのは、判決ではなくて警告であり、断罪ではなくて悔い改めへの勧めであることに注目しましょう。「家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは」遅すぎるという警告は、緊急の悔い改めを迫る呼びかけであって、今朝全世界の教会がこの同じ神のことは聞かされているのです。

2. ヘブ

長い歴史の中で、一般の信徒たちが健全な形で聖書に親しんだ時代は、決して多くはありませんでした。事実、聖書解釈の歴史は、いわば教会の信仰の迷走の歴史でもありました。しかし過去 250 年ほどの聖書神学の発展は、現代の教会に多くの有益な貢献をもたらしました。しかし不思議なことに、それは一般信徒の世界的な聖書離れの時代と重なっているのです。一部の原理主義的な教派や集団の人々の偏った聖書への執着を除いては、一般のキリスト教信者たちはほとんど全く聖書を知らずに生活しています。

一方では第二バチカン公会議が、神の啓示を伝達するものとして聖伝と聖書を明確に定義して、ミサの中のことはの典礼を大切にすることを教えたのに対して、他方では教会の現場での著しい聖書軽視と聖書

そのものへの無知が放置されていて、「使徒たちから伝えられたこと」(神の啓示に関する教義憲章 8)とはかけ離れた「ほかの福音」(ガラ 1:6)が、人々の間に流布しています。

vv.12-13 「だから、萎えた手と弱くなった膝をまっすぐにしなさい。また、足の不自由な人が踏み外すことなく、むしろいやされるように、自分の足でまっすぐな道を歩きなさい。」

それは、使徒たちが伝えた福音に固く立ち、それを拠り所とすることによってだけ可能なことであり、「あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう」(I コリ 15:2) とある通りです。天上のキリストは共にミサをささげる会衆に今も聖書を通して語りかけ、これを鍛錬してくださいませ。福音は「信仰の創始者でありまた完成者であるイエス」(12:2)を見上げながら歩むために、聖書を通して現代の私たちに語りかけているのです。

3. イザ

第三イザヤ(イザ 56-66 章)のおそらく編集者によると思われるこのテキストで、終末の神の国に主がすべての国、すべての言葉の民を集めるという大いなる預言者的展望が語られました。彼らを集める者は、主に遣わされて行って、全世界から神の国を受け継ぐ兄弟を連れて来るとこの期待が、ルカ福音書の物語りの背景となっていることは、容易に推測出来ます。

神の国への備えをすること、これこそがイエスの福音の第一の、そして最大の要求であったと福音書は伝えています。そして天上のイエスは、今朝共にミサをささげるために集まっている私たちに、聖書を通して再び同じ要求を語っておられるのです。それが「狭い戸口から入る」という言葉で語られていることです。キリストの恵みにより、信仰によって救われた(エフェ 2:8)私たちも、第三イザヤの語った大いなる預言者的展望を聞くとき、心の内に熱いものがこみ上げて来るのを感じるではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

8月29日 年間第22主日

シラ 3:17-18,20,28-29 ヘブ 12:18~24 ルカ 14:1,7~14

1. ルカ

v.11 「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」

福音書におけるこの用語の前後関係から明らかなことは、「高ぶる者」とはファリサイ派に代表されるユダヤ人のことであり、「へりくだる者」とはキリストの救いに与った神の国の民を指しているということです(ルカ 18:14、マタ 23:12 参照)。私たちが読んでいるのは単なる道徳の書物ではなくて、キリストの福音と神の国の希望を語る聖書なのだということに、十分に留意する必要があります。

ファリサイ派をもって代表されるユダヤ人は、律法を守ることによって救われると信じる人々、自ら律法の知識を持っていると高ぶっている者として聖書に描かれています(ロマ 2:17-20 参照)。彼らはキリストとその福音を受け入れませんでした。そのユダヤ人が汚れた民として蔑視した異邦人の世界に、キリストの福音は宣べ伝えられて、教会の歴史が始まりました。聖書は異邦人を、キリストの福音に対してへりくだる者、「恵みにより、信仰によって(無償で)救われた」者として描いているのです(エフェ 2:8、ロマ 3:24)。

このような背景を理解することによって、私たちは今朝の福音書のテキストが語るメッセージを正しく聞くことはありませんか。何が「高ぶる者」となることで、何が「へりくだる者」となることなのか、イエスが招いてくれた人に言われた言葉は、私たちにちって何を意味するのかを理解したいのです。単なる道徳の書物は、それがどんなに素晴らしいものであっても、私たちにキリストの救いを与えてはくれないからです。

2.

旧新約聖書を通じて、「へりくだる」とは神の前に自らを低くすることです。人は神を忘れると、心おごり、高ぶります(申 8:11-18 参照)。信仰の父アブラハムもへりくだりの模範として描かれ、モーセもへりくだりの人でありました。そして正にイエス・キリストこそは、へりくだって受肉された神の子、救い主でありました(フィリ 2:6-11 参照)。

福音書は、その朗読を聞く会衆に向かって、キリストの福音と神の御業へのへりくだりを呼びかけているのです。高ぶって律法の義を追い求めたユダヤ人は救われず、へりくだって福音を受け入れた異邦人はキリストの救いを得ました。教会の教導職への従順は、学ぶ者たちの福音へのへりくだりを目的として語られています(1ペト 5:5 参照)。

「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」を招くとは、このような教会の宣教のことを指して言っている比喻であって、教会のこの働きに共に参加するすべての信者に「正しい者たちが復活するとき、あなたは報われる」と約束されているのです。

3. ヘブ

キリストの福音を説明するために、ここではシナイ山におけるモーセの律法授与の場面(出 19:12 以下)と、生ける神の都、天のエルサレム(黙 21:1 以下)とが対比されています。アベルの血はカインの追放を叫びましたが(創 4:10 以下)、イエスの血は私たちを天の聖所に導き入れます(ヘブ 10:19)。私たちはキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされました(ロマ 3:24)。それは律法の実行によってではなくて、イエス・キリストへの信仰によって与えられた救いであって、「始めから終わりまで信仰を通して実現されるのです」(ロマ 1:17)。

4.

それでは私たちの教会、21世紀を歩み始めた日本のカトリック教会の現状は、どうでしょうか。カトリック教会の信者たちは、自分たちが「貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人」であったにもかかわらず、「恵みにより、信仰によって救われた」(エフェ 2:8)と考えているのでしょうか。また、そのような人々を教会に迎えようとして来たのでしょうか。

もしかすると、無意識のうちに自分たちをキリストの恵みを所有する特権階級のように思い上がっていて、実際には自ら福音を学ぶことなく、それゆえ他人にキリストの福音を教えることが全く出来ない……、そんな善男善女が日曜日に御聖堂に集まっているというのが実状ではないでしょうか。確かに私たちは人間的には「へりくだる者」であり、道徳的には少しばかりハイレベルかもしれないけれど、それで自分たちが神の国を受け継ぐ特権を与えられていると思いがちな“ファリサイ臭さ”が、隣人たちをキリストの福音から遠ざけて来たのではなかったでしょうか。

かつてファリサイ派の人々が神の恵みから遠ざけられたのは、異邦人である私たちがキリストの救いに与るためだったのかも知れません。しかし異邦人である私たちは思い上がってはならないのです。「神の慈しみと厳しさを考えなさい」(ロマ 11:17-22 参照)と、主は私たちに呼びかけておられます。

ハレルヤ、アーメン。